

私が懇願して叶えた皇帝との結婚、毎晩の逢瀬にキュンキュンさせられています  
体験版

1

「……っ、んう！ 陛下、だめ……そこは……！」

絹のシャツが、汗ばんだ肌に絡みつく。天蓋付きの豪華なベッドの上、ルミナは必死に身をよじって逃れようとしたが、その細い腰は強靱な腕によつて完全に封じ込められていた。のしかかってくるのは、この大帝国の若き皇帝、ゼノスだ。普段は冷徹なまでに理知的な光を宿すその金色の瞳が、今は熱っぽい情欲に濡れ、獲物を狙う猛獣のようにルミナだけを映している。

「ルミナ。私の愛しい妻……逃げることなど許さないと云つただろう」

「で、ですが……もう、朝が……これ以上は、お体に障ります……！」

「構わない。君が足りない。もっと、私の奥深くまで刻み込ませてくれ」

ゼノスの低く甘い声が鼓膜を震わせると同時に、ルミナの敏感な箇所——ふわりとした狐の耳が、大きな手で愛おしげに揉みしだかれた。

「あひっ♡」

情けない声が漏れる。ルミナは人間ではない。「山神の化身」と呼ばれる、稀少な種族の生き残りだ。黒曜石のような瞳と髪、そして頭頂部にある獣の耳。興奮すれば、臀部のあたりからふさふさとした黒い尻尾が現れてしまう。その耳は、ルミナにとって最大の弱点であり、性感帯でもあった。

「ふふ、可愛い反応だ。ここを触られると、君の子宮きゅう、と可愛く収縮するのがわかるよ」

「そ、そんな恥ずかしいこと……言わないで、ください……」

「事実だ。ほら、海神の呪いが疼いている……。君の清浄な体で、私を鎮めてくれ」

ゼノスは苦しい表情を装いながら、ルミナの太ももを強引に割り開いた。

——呪い。その言葉を聞くと、ルミナは拒絶できなくなる。ゼノスはかつて海神の怒りに触れ、その身に強大な呪いを受けているという。夜になると身体が焼けるように熱くなり、こうして「山神の気」を持つルミナと肌を合わせなければ、命に関わると聞かされていた。

だから、これは治療なのだ。ルミナは自分にそう言い聞かせる。けれど、ゼノスのペニスが蜜壺の入り口を割り、最奥へと突き進んでくる感覚は、治療というにはあまりにも甘く、そして暴力的だった。

「あつ、ああつ！ 深いっ、陛下、ふかいっ！」

「ゼノスと呼んでくれ、ルミナ。……愛している、誰にも渡さない」

「んああっ♡ ゼ、ノスさまあっ！」

ガツン、ガツン、と腰が打ち付けられるたびに、ルミナの思考は白く弾ける。子宮の底をノックされる快感に、隠していた尻尾がポンと飛び出し、ゼノスの背中に絡みついた。それを見て、皇帝はさらに嗜虐的な笑みを深め、より激しく腰を振るう。これが、毎晩続く「儀式」だった。

◇

事の始まりは、半年前に遡る。共和国の国境近く、吹き溜まりのような街で、ルミナはひっそりと理髪店を営んでいた。亡き母から受け継いだ店だ。母は美しかったが、不幸だった。「山神の化身」という伝承を妄信するキール男爵という男に目をつけられ、監禁され、慰み者にされた末にルミナを産んだ。

命からがら逃げ出した母は、ルミナに遺言を残した。

『決して目立つてはいけない。黒目黒髪は、この国では卑しい色とされるけれど、それが貴方を守る迷彩になるわ。でも、あの耳と尻尾だけは……決して見られてはいけないよ』

母の教えを守り、ルミナは頭巾を被って生活していた。この街には西の国から流れてきた黒髪の娼婦が多く、ルミナの容姿は幸いにも「よくある貧しい娘」として風景に溶け込んでいた。だが、キール男爵の搜索の手が、この辺境の街にまで伸びてきているという噂を耳にした時、ルミナは戦慄した。見つければ、母と同じように「飼育」される。恐怖に震えていたある日、店に一人の客が訪れた。

茶色に染めた髪、顔を隠すように長く伸ばした前髪。質素だが仕立ての良い服を着た、旅の武士。それが、お忍びで視察に来ていたゼノスだった。

彼が席に座り、ルミナがハサミを入れた瞬間、風が吹いてルミナの頭巾が少しずれた。一瞬だけ露わになった狐の耳。ゼノスは鏡越しにそれを見て、驚くどころか、目を細めて微笑んだのだ。

『美しいな。……まるで、物語のようだ』

その声の響きに、ルミナは心臓を射抜かれたような錯覚を覚えた。彼なら、自分を守ってくれるかもしれない。男爵の権力にも屈しない強さを、この男は持っている気がする。ルミナは、人生で一度きりの賭けに出た。

「あの……私と、結婚してくださいませんか！ 私、床上手ではないかもしれませんが、料理と洗濯は得意です！ 髪も切れます！ だから……！」

震える手で剃刀を握りしめ、客に逆プロポーズをする理髪師など、前代未聞だっただろう。しかし、ゼノスはきよとした後、腹を抱えて笑い――そして、真剣な眼差しでルミナの手を取った。

『いいだろう。俺も、ちょうど嫁を探していたんだ。……ただし、俺の家は少々複雑だね。苦勞をかけるかもしれないが、いいか？』

その「少々複雑」が、まさか「皇帝家」だとは、ルミナは夢にも思っていなかったのだ。

◇

「……はあ、はあ、ルミナ……」

「んう……っ」

現在に戻る。

数度の絶頂を迎えさせられ、ぐったりとシートに沈むルミナの額に、ゼノスが優しいキスを落とす。ルミナは複雑な思いでその美しい金髪を見つめた。彼は、約束を守ってくれた。ルミナを男爵の手から守るため、皇位継承権争いを勝ち抜き、皇帝の座に就いたのだ。

「皇帝の妻」となれば、いかに男爵といえども手出しはできない。けれど、それはルミナにとって申し訳なさで胸が張り裂けそうになる事実でもあった。

（私のために、あんなに自由を愛していたゼノス様を、玉座という鳥籠に縛り付けてしまった……）

それに、この結婚はあくまで「契約」のはずだ。彼が毎晩こうしてルミナを抱くのも、海神の呪いを抑えるため。山神の血を引くルミナの体液や気が、彼の苦痛を和らげるからに過ぎない。愛されているわけではない。必要とされているのは、私の「機能」だけ。

「ゼノス様……」

「なんだ？」

「もう、呪いは……鎮まりましたか？ これ以上なさつては、明日のご公務に……」

「まだだ」

ゼノスは即答し、ルミナの身体を裏返した。四つん這いの姿勢。最も無防備で、屈辱的かつ背徳的な体勢だ。豊かな臀部が持ち上げられ、目の前で揺れる尻尾の付け根に、ゼノスの熱い視線が突き刺さるのがわかる。

「ルミナ、今日は……こっちで呪いを鎮めたい」

ゼノスの長い指が、秘裂ではなく、その少し後ろ――きゅつと閉じた蕾の上をなぞった。

「え……？」

「海神の毒は、より深く、暗い場所に溜まるという。……ここを開いて、私を受け入れてくれないか？」

「そ、そこは……っ！ 不浄の穴です、排泄するところです……！ 陛下のような高貴な方が触れていい場所では……っ！」

ルミナはパニックになり、逃げ出そうとする。しかし、ゼノスの腕がルミナの腰をガッチリと掴み、逃走を許さない。それどころか、彼はルミナの耳元に唇を寄せ、とろけるような甘い声で囁いた。

「不浄？ とんでもない。ここは君の体の中で、一番正直で、手つかずの場所だろう？」

私は君のすべてを知りたいんだ。……それに、ここを使えば、避妊を気にせず、思う存分中に注げる」

ぬぷつ。

言葉と共に、ローションで濡らされた指先が、第一関節まで埋め込まれた。

「ひあっ！？」

異物感。排泄の合図と似て非なる、奇妙な圧迫感。ルミナの背筋に、ゾクゾクとした悪寒と熱が走る。

「リラックスして。君ならできる。……私のために、この狭い入り口を広げてくれ、ルミナ」

それは、懇願という名の命令だった。愛する夫のために、呪いを解くために。ルミナに拒否権など最初から存在しなかった。そして心のどこかで、彼にそこまで求められることに、背筋が痺れるような歓喜を感じてしまっている自分にも、ルミナはまだ気づいていなかった。

（ああ、だめ……そんなところ、広げられたら……私、どうにかなっちゃう……！）  
夜はまだ、明けない。